

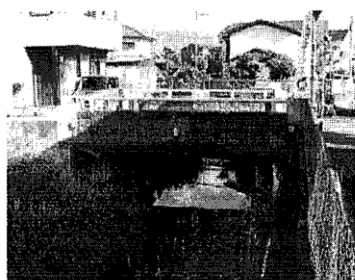
「銭屋橋と三反物の樋」

「近世の新田開発の遺産①」



御供田新橋を渡って恩智川を越え、東に100メートルほど行くと泉町に入ります。泉町は、昭和43年の第四期住居表示整備事業の際に御供田から分離してきた新しいまちです。あまり知られていませんが、宮本輝の小説「春の夢」に登場する主人公の下宿は泉町がモデルとされています。泉公園から200メートルほど東に行くと、銭屋川に架かる銭屋橋が見えてきます。

銭屋橋のすぐ南では銭屋川に大東第12水路（通称・12号水路）が合流しています。12号水路は、南新田1丁目で大川から分流し、真北に一直線に流れています。阪奈道路下り線から南側は「せせらぎ水路」として整備され、市民の憩いの場となっています。北側は銭屋橋の手前まで土で埋められ、防草シートがかけられていますが、以前は銭屋橋の南側から「三反物の樋」を見ることが



北側から見た銭屋橋



三反物の樋
(平成15年撮影)



南新田1丁目のせせらぎ水路

ができました。三反物の樋は、江戸時代後期の弘化2年（1845）に作られた石製の樋門で、井路（水路）の水量調節を行うことで当地の農業を支えていました。

銭屋橋を渡ると平野屋に入ります。当地周辺は18世紀初めに深野池を開発してできた新田地帯で、現在地名として残る「平野屋」や「銭屋」は、かつて新田を支配していた大坂の商家の屋号でした。ここから道幅は狭くなり、すぐ東の路地を北に入り、住宅地の中を100メートルほど行くと、左手にフェンスで囲まれた空地が見えてきます。この空地を含む住宅地帯にはかつて平野屋新田会所という大きなお屋敷がありました。今回は、新田開発と会所の歴史について紹介します。（生涯学習課）

「平野屋新田会所跡」

「近世の新田開発の遺産②」

今から300年ほど前の江戸時代中期、それまで北向きに流れていた大和川が西向きに付け替えられたことに伴い、河内平野一帯では多くの新田が開かれました。この時、大東市域にあった深野池も東本願寺難波御堂によって開発され、後に新田の所有権は大坂の商人に譲渡されました。

平野屋地区にかつてあった平野屋新田会所は、平野屋又右衛門が所有した深野南・河内屋南新田（現在の谷川・深野南・平野屋・南新田・東大阪市元町地区）を管理するための出先機関として設置されました。会所には大坂から派遣された支配人がおり、年貢の収納や、農具の貸し出し、村人同士のめし事、仲裁などの業務が行われていました。新田の所有者は、何度か移り変わり、文政7年（1824）に銭屋（高松）長左衛門の所有となりましたが、それ以来、地元では会所を「高松会所」とも呼ぶようになったそうです。



平野屋新田会所跡



表長屋門（平成16年頃）



米蔵と銭屋川（昭和30年代頃）

東西約90メートル、南北約60メートルの広大な屋敷地の中央には主屋棟と座敷棟が、東側には庭園や池が、西側には米蔵や道具蔵が、南側には立派な表長屋門がありました。現在、屋敷地の大部分は住宅地になっていますが、道具蔵や米蔵などの礎石が残る屋敷地北西部を大東市が取得し、公有地としています。フェンスで囲まれた公有地内には、礎石のほかに銭屋川に通じる船着場の階段の遺構も地中で保存されています。大東市教育委員会では、会所跡地を近い将来有効に整備・活用していくため、平野屋新田会所市民サポーターと共に魅力発信などの活動に取り組んでいるところです。

（生涯学習課）